第37回 特別対談企画

コロナ禍がもたらした、試練と身近な幸せの再発見。

中日新聞北陸本社
編集委員・論説委員
山本 義之 氏

新型コロナウイルスが日本全国に拡大してから、早いもので1年が経ちました。第3波に対し首都圏1都3県で発布されていた緊急事態宣言は、3月5日時点でまだ解除に至っていません。政府や地元自治体は感染の抑制に手こずったままです。

一方、石川県では3月に入ってから新規感染者数が減少傾向にあり、とりあえずヤマを越えた感はあります。

今回は北陸中日新聞で編集委員と論説委員を兼務する山本義之さんに対談をお願いしました。新型コロナウイルスの憂延は、私たちに自粛生活を強制するものの、幸せの在り処を気づかせるきっかけにもなっているのではないか――。そう感じていたところ、同紙の1月3日朝刊にその考えを裏付けてくれる社説が掲載され、我が意を得たりの思いでした。

執筆された山本さんに、コロナ禍で再発見される幸せの価値について聞きました。

ジンクスか？ 改元後の経済停滞

畠 新型コロナウイルスによってこれまでお亡くなりになった方々のご冥福と、闘病中の方々の一日も早い回復を祈念するとともに、日夜大変なご努力をされている医療関係者の方々に感謝を申し上げて、対談を始めさせていただきます。今回は北陸中日新聞の編集委員・論説委員を務められている山本さんにお願いしました。

山本 宜しくお願いいたします。

畠 私はコロナ禍で多くの方の仕事観や家族観が大きく変化したのではないかと考えています。自粛生活の中でも仕事に就けること、続けられること、家族が健康を損なわずに自分のそばにいてくれること。こうしたことが実はとても幸運で、この上ない喜びであることに気づいた人は多いはずです。そう考えていた折に、北陸中日新聞の今年1月3日朝刊の社説に目が留まりました。「幸せ」って何だろう、と題した山本さんが執筆された文章でした。

山本 テレワーク等により通勤時間がなくなり、家族と過ごす時間が増えて幸福度が上がっていることに触れた内容でした。後半では、北陸三県が幸福度ランキングで上位に位置し、移住促進の武器になることも指摘しました。

畠 慶応義塾大学大学院の前野隆司教授らが昨年4～5月に実施したアンケート調査の結果が一部紹介されていて、私自身の実感を裏打ちしてくれる内容でした。その他の記述もとても共感できたものですから、今回、山本さんに対談をお願いした次第です。

山本 ありがとうございます。お役に立てれば幸いです。

畠 「改元のジンクス」と言っていいと思います。大正から昭和に改元された翌年の1927（昭和2）年に国内で金融恐慌、1929（昭和4）年には世界恐慌が起きました。平成への改元後はバブル崩壊。そして、令和になってからは新型コロナウイルスによる経済停滞です。偶然だと分かりきっていても、日本で時代の節目を迎えるたびに何かが起きるのは、気持ちのいいものではありません。

コロナ対策に正解はない

山本 今回のコロナ禍に限ってよくよく考えてみると、これは現代文明への警鐘、もしくは過度に進みすぎたグローバリズム、グローバリゼーションに対する自然環境からのしっぺ返しと捉えることができます。ヒト・モノ・カネの動きに乗って、コロナウイルスはあっという間に世界に広がりました。未知のウイルスを短期間に運んでしまう仕組みの異常さを「是正せよ」「改めよ」と警告されているような気もします。

畠 ウイルスが命を脅かす怖さがありますが、半面、人混みや雑踏が減って得られたメリット、取り戻せた静かさなども結構ありますよね。

山本 そうですね。京都では、「静かな京都に戻ってよかった」と思う地元の人が多いそうです。観光地に受け皿のキャパシティ以上の観光客が押し寄せることをオーバーツーリズムと呼ぶのですが、外国人が個人宅の庭に入り込んだりするなど、行き過ぎた観光が市民生活に大きな迷惑をかけていました。数珠つなぎのバスやマイカー観光客の減少で道路渋滞も解消され、本来の京都に戻ったという感想が漏れているそうです。

畠 金沢も観光客が減ったので、観光地周辺に住む市民の中には、住みやすくなったと感じている人はいるでしょうね。

山本 コロナの収束後、どういくかを考えるいい機会を与えてもらった感じですね。

畠 日本はコロナ対策が後手後手です。例えば、コロナの発生源とされる中国からの入国を強く制限したのは、昨年の3月9日でした。中国に関しては、習近平主席が国賓として4月に来日する予定があったので、中国側に遠慮した。結局は1年延期となりましたが、東京五輪の開催が7月に迫っていたことも政治判断を遅らせた原因でしょう。山本さんはどう思いますか。

山本 まず前提として、コロナ対策に正解はないということを申し上げたい。

畠 正解がない…？

山本 そうです。決まった答えなどない。だから、何に取り組めばいいのか分からない。

畠 堂々巡りになるだけでしょう。

山本 正解がない時は大胆に、思いきってやってもいいと思うのです。

畠 国のコロナ対策には、何事にも躊躇を感じますよね。

遅きに失したGo Toの停止

山本 国と自治体の関係が、ものすごく曖昧でした。新型コロナウイルスに国や自治体が急ぎ対応するため、2013年施行の新型インフルエンザ等対策特別措置法をいじって、すぐに改正法を国会に通しました。自治体の大事な役割も明記されなかったために、あとで非常に困った事態となりました。

畠 どんなところですか？

山本 自粛要請をお願いするための協力金とその財源についてです。東京都は財政が豊かですから、自力で協力金を用意できます。しかし、他の都道府県はそうはいかない。そこで大もめになって、結局、国が交付金を追加、追加で出す格好になりました。

畠 前例のないことに取り組むのが苦手な行政の体質が如実に現れていました。

山本 情報は世界中から集まるのですから、どの国がどんなことをしているのか、その気になれば情報を収集して参考にできたはずです。また、地方との対話やすり合わせをもっと密にやればよかったのに、突然、国が独断で決めてしまったりして、ちぐはぐな面がありました。

畠 「たら、れば」したくなる国の逸機はほかにもあります。去年の11月下旬の連休、あの頃から感染者数が徐々に増えてきました。そこで早めの対策を講じていれば、12月、1月の急増はなかったのではないかと思います。

山本 GoToトラベル、GoToイートでアクセルを踏み込む一方、ブレーキとなる感染防止も国は叫んでいました。12月になってようやく政府は重い腰を上げ、GoToトラベル、GoToイートを停止しましたが、緊急事態宣言を11月に出していれば、年末年始は里帰りできたかもしれませんね。

畠 「自粛せよ、会食に行くな、遊びに行くな」と言いながら、GoToをやっていれば意味がないですよね。遊びに行くどころか、そもそも休みさえ取れない医療関係者がたくさんいるのに、気持ちを逆撫でしていました。

山本 経済を回したいという政府の気持ちは十分、理解できます。でも、GoToをやるお金があるなら、観光業者、飲食店への補償にまわせばいいと訴える声も小さくありませんでした。

若者からの接種も議論してほしい

畠 国民の生命、財産を守れないようでは、政府としての体面をなしていません。ワクチン接種もどうなるのか、いま一つ不透明です。

山本 現時点ではワクチンが収束

畠経営グループ　会長　畠 善昭

中日新聞北陸本社編集委員・論説委員　山本 義之 氏

やまもとよしゆき。1959年1月石川県小松市生まれ。1981年金沢大学法文学部法学科卒業後、中日新聞社入社。地方支局勤務後、北陸本社で政治・経済を担当。その後小松支局長、北陸本社論説委員（社説執筆）を務め、2010年から名古屋本社論説室論説委員として総務省、国交省等を担当し東日本大震災復興もテーマに。2013年北陸本社に戻り論説委員を兼任しながら経済部長や編集委員を歴任、2019年から北陸中日懇話会事務長も兼務する。小松市を拠点にまちづくりのNPO法人や身近なSDGsの会などを主宰し、国際交流活動にも積極的に参加する。

の決め手になるだろうと思います。ただ、準備が遅れているのは、副反応を強く警戒する日本人の慎重な気質もあるでしょうし、欧米に比べて罹患者数が少なく、治験モデルが多くないことも理由でしょう。

私はそれよりも、接種対象者の優先順位に少々疑問を持っています。

畠 どんなところですか。

山本 まず医療関係者が打つというのはわかります。その次にお年寄り、介護施設の関係者の順でしたでしょうか。私は後回しになっている若者の順位を上げてもいいのではないかと思っています。感染が多いのは若者世代です。彼らが会食でうつしあい、家に帰って家族にうつし、もし家にお年寄りがいれば重症化する。多くのクラスターの原因になっているのに、若者に先に接種してもらう議論が生まれないのが残念です。

畠 言われてみれば、そうですね。

山本 実際、外国で若者から打っているところもあるのです。今からでも遅くないので、そうした国での効果も調べて、議論の俎上に載せてほしいと思っています。今のところ、ワクチンに頼るしかないですからね。

畠 ワクチンが奏功して新型コロナが仮に収束しても、次の新手のウイルスがおそらく出てくるでしょう。現在もコロナの変異種が徐々に日本国内に浸透して、大変警戒されています。感染症との戦いは今後も続くのでしょうね。

山本 その可能性は確かにあります。

畠 ところで、先に触れた山本さんの社説では、日本総合研究所が2年置きに発表している「全47都道府県幸福度ランキング」についても紹介されていて、2020年版では福井県が4回連続の1位、富山県が2位、3位の東京を挟んで石川県が4位でした。

山本 北欧とかブータンの影響もあるのでしょう。新たな尺度として、幸福度を採用している自治体が増えてきています。

感謝する心が幸せを見つける

畠 山本さんの社説の記述に目を通していてふと浮かんだのは、幸せだから感謝するのではなくて、感謝するから人間は幸せになっていくのではないかという思いでした。感受性豊かにいろいろなことに感謝できるから、結局、幸せになっていくのかなと。

山本 そうですね。おっしゃるとおりです。感謝するから幸せなのです。

家族が一緒にいてくれてよかったなと思って家族に感謝する。従業員が一生懸命、コロナに負けずに働いてくれてありがたいと感謝する。そして、その感謝の瞬間、瞬間に幸せを感じる。

畠 正月にうちの家内に、「去年は一年間、何も変わったことがなかったな」と言ったら、家内は「それが一番幸せなのよ」と笑っていました。

山本 奥様がおっしゃるのは、「無事でいられてよかったね」と、それに感謝するということですよね。それが幸せを感じるということだと。そして、幸せを感じると笑顔にもなれるのです。

ついでにいうと、社説で紹介した慶応義塾大学の前野先生が「幸福学」というものを学問にしていて、「幸せの四因子」を定義しています。

畠 四因子の内訳は？

山本 「やってみよう」「ありがとう」「なんとかなる」「ありのままに」です。

今、コロナになって一番危ない人は、やり甲斐がない人とつながりがない人と言われています。やり甲斐を持ってつながりを持つ。そうすれば孤独感がなくなって、前向きになれて、悲観することをやめられます。

畠 やはり、「ありがとう」があります。

ところで、山本さんは件の社説のラストのあたりで、「幸せとは目標でなく、今の日常に気づくことかもしれません」と書かれていて、この点も共感しました。日常を何気なく生活できる。それが一番の幸せなのです。そこに凡人はなかなか気づけません。

山本 忙しい時は皆、気づかないものです。でも、コロナ禍で立ち止まることができるようになり、日常の幸せに気づくのです。

一方、例えば自粛警察とかマスク警察とか血道をあげる人たちは、そういうことに気づけておらず、逆に幸せから遠ざかっているように私には見えます。

自分の喜びをまず探してみよう

畠 立ち止まったときに何に気づけるかは、とても大事だと思います。フェース・トゥ・フェースでの商談や交渉事がはばかられる時期でもあるので、企業はあまり積極的に外に打って出られません。ならば、社員の中身の充実を図る。経営者ももっと勉強すればいい。

一度立ち止まって自分の器を広げ、教養を高めていくことが、一番重要のように感じています。山本さんは、これから人間は何を求めて、何を芯にして生きていけばいいとお考えですか。

山本 そうですね、アフターコロナを見越して、それぞれのスキルを高める、新たなスキルを身につけることは肝要ですね。それと、仕事でもいい、趣味でもいい。社会生活の中で、自分はどうすれば楽しいのか、嬉しいのか、喜びを感じられるのか。そうしたことをまずは日常の中で探してみるといいのではないでしょうか。そしてそこから、他者とつながってみる。つながることに人はより強く幸せを感じます。

畠 禍（わざわい）転じて福と為す。多くの犠牲者を生んでいるコロナ禍が、幸福感を実感できる心豊かな社会への転換点となることを願わずにおられません。

また、コロナ禍は人の社会関係性を希薄にして孤独を加速させる側面もあり、だからこそこの状況下で幸せを感じられるのは、二重の意味で幸せなのだと感謝したいところです。

山本さん、本日はありがとうございました。

山本 こちらこそ、ありがとうございました。